



■拘束するまで

【司祭が自宅で寝ているところに魔女が夜這い】

魔女 「美人司祭さん、こんばんはぁ」

司祭 「んっ……」

魔女 「あらあら、ぐっすり眠っちゃって」 そんな  
じゃ、えっちな魔女さんに夜這いされちゃうわよ」

「

【魔女、司祭の脚や頬に触れる。】

魔女 「うふふ」 すべすべでキレイ」 清楚な

『ヒーロー』とは思えないくらい　●　これはおちんぽにも期待できそうね　●　きっとキレイな顔に似合わない、ドスケベおちんぽなんでしょねえ……　●　反応がないのはつまらないけど……もう我慢できないわ　●　じゃ、早速……」

【魔女がチンポに触ろうとしたところで、司祭が目覚め驚き、飛びのいて距離を取る】

司祭　「つつ？！　な、何ですの、あなた！　何をしているのですっ！」

魔女　「やっと起きた　●　ダメよお、自分の家だからって安心してちゃ……　●　『ヒーロー』はいつ『ヒーロー』に襲われるかわからないんだから　●　」

司祭 「襲うつて……ま、まさか夜這い……？」

魔女 「せいーかい」

【魔女、茶化すように自己紹介】

魔女 「私はヒールのリコ。悪い魔女よ。あなたみたいにキレイな『ヒーロー』のおちんぽをどぴゅどぴゅさせて、ヒールにするのが趣味なの」

司祭 「やはり、ヒール……！ いきなり現れて夜這いなど、おふぎがすぎますわ！ わたくしはヒールになどなりません、早く出ていきなさい！」

魔女 「ふふ」 私の見立て通り、気丈で清楚で、正義感の高い司祭さんね」 堕とし甲斐があるわあ……

」

司祭 「っ……出ていきなさいと言っているでしょう？！ それ以上近付くのではあれば、痛い目を見ますよ？！」

魔女 「いいわよお、そうこなくちや ● 本気で抵抗してるのを墮とすのが私の愉しみだもの ● さあ、せいぜい抵抗しなさい ●」

司祭 「なんと悪趣味な……もう許せません！ では、この司祭・セイラがあなたを懲らしめて差し上げますわ！ はああっ！」

魔女 「あらあら、司祭さんらしからぬ攻撃的な魔力。でもお…… ●」

【司祭セイラの魔法攻撃。しかし魔女リコが簡単に掻き消す】

魔女 「はい、効かない」

司祭 「なっ?! わたくしの魔法を、掻き消した…  
…?」

魔女 「驚いた? 私の魔力を甘く見ちゃダメよお」  
それに、セイラちゃん……あなたのことは調べてあるんだから。とっても鍛えてるんでしょうけど……所詮はヒーロー。あなたの魔導力じゃ、私にはかなわないわ」

司祭 「なんですの、この魔力……? これほどの方がいるなんて……! ですが、ヒールに屈するわけにはまいりませんわ!」

【司祭、また魔力を溜める】

魔女 「ふふ、言われて諦めるような人じゃないわよねえ。そうこなくちや」

【魔女、じわじわ近付いていく。司祭、魔力を溜めながら警告】

司祭 「……これが最後の警告です。今すぐ出ておいきなさい。さもなくば、怪我ではすみませんよ！」

魔女 「遠慮することはないわ。全力を出しなさい。その上で、屈服させてあげるから……」

司祭 「……そうですか。仕方ありませんね……では、わたくしの奥義を受けなさい！」

【司祭、巨大な魔力を生成。魔女、焦る（演技）】

魔女 「っ……何、その魔法は？！ 私も知らない切札を隠し持ってたのねえ……なかなか侮れないじゃない……！ ……ねえ、今回のところは見逃してあげるわ。あなたも、たかが魔女如きに、そんな大量の魔力使いたくないでしょう？ だから、ね？ お願い、待って……！」

司祭 「警告はしました。愚かなヒールの魔女よ、裁きを受けなさい！」

魔女 「待って、ウソでしょ？ きやあああああ……：あああ……ん ● ……うつふふつ ● なあんちゃつてえ」

司祭 「そ、そんなまさかつ？ わたくしの奥義まで……



…！」

魔女 「その程度の魔法、本気で効くと思ったの？ ほ  
らほらがんばって ● 抵抗しないと、悪い魔女さんに  
近寄られちゃう ●」

司祭 「くうつ、も、もう魔力が……！ しかしあなた  
ここまでの力、一体どうやって……」

魔女 「さあ？ どうやったか、わかるかしらあ ●」

司祭 「……っ！ あなた、まさか……既に他の方を手  
にかけて……？」

### 【設定説明】

魔女 「はい、せいかい ● 今まで、色んなふたなり  
おちんぼから搾り取ってきたの ● 何人いじめてきた  
かしら……もう覚えてないわ ●」

司祭 「こ……この、外道……！」

魔女 「いいわあ、そういう褒め言葉ほとんど言っちゃうだあい ●二度とそんな口が聞けなくなるよう、嫩ってあげたくなっちゃうから…… ●」

司祭 「ひっ……！」

魔女 「いいわあ、キレイな顔が絶望する瞬間……たまんなあい ● ほら、必死に頑張つて ● もっともがく姿を愉ませてえ ●」

司祭 「こ、来ないで……！ 近寄らないでっ！」

魔女 「必死で可愛いわねえ……そんなに私が怖い？  
で、も…… ●」

司祭 「ああっ！」

【魔女、司祭を拘束。魔力で両手を後ろに固定される】

魔女 「……はーい、捕まえた ● 可愛い抵抗ありがとう ●」

司祭 「あぐっ……腕が……っ！」

魔女 「うふっ、両手を後ろで組ませただけで、そんなに苦しんでくれるの？ほんとに可愛いわぁ ● お札に、たあっぷりいじめてあげるわね ● とりあえず、ベッドに行きましょうか ●」

【司祭、ベッドの上で仰向けにされる】

司祭 「あぁっ！ うっ……こ、このようなことをして！ 天罰が下りますよ！」

魔女 「いいわねえ、この状況でもまだ強気な態度がとれる精神力。でも、もう少し魔導力も鍛えた方がいいわよお？ その方が、私がいっぱい愉しめるもの ● そ

うだ、この際だから、その拘束魔法を自力で解けるようにがんばりなさい ● ……じゃ、セイラちゃんが修業がんばってる間……ちよつとイタズラちゃうわね……

●  
「

司祭 「や、やめなさい！ 早く、これを解きなさいっ！

いやっ……ああああ………っっ！」

■ 1. 媚薬マッサージ

魔女 「さあて……まずはコレを使いましょうか ●」

司祭 「な、なんですの、その液体はっ?！」

魔女 「ふふ、いい反応 ● ……なんだと思う? とくっても危ないモノよ ●」

司祭 「っ! ま、まさか……」

魔女 「あら、セイラちゃん、清楚な顔して知ってるのねえ ● 精液から媚薬が作れること ●」

司祭 「あなたは……一体、どこまで人道に外れたことを……」

魔女 「気持ち良いことのためだから別にいいじゃない

● さあ、たっつぷり両手に伸ばしてえ……さあ、どこから塗ろうかしら」

司祭 「もうおよしなさい、こんなことっ! 他人に無

理矢理、こんなことをして、許されるはずが……」

魔女 「やぁーん ● 説教しながらも、脚びっちり閉じちゃって ● 可愛いわぁ ● どこを触られるか察しちゃったのねえ ● でも、安心して？ これ……脚に塗っても、効き目はバツグンだから ●」

司祭 「やめっ……あっ！」

魔女 「はあい、媚薬マッサージはじめます ● まずはおくらはぎをお、もみ ● もみ ●」

司祭 「ひっ！ いや……あぁっ！」

魔女 「どう？ ぬるぬるして、あったかくて、気持ち良くなってこない？」

司祭 「そんなこと、ありませんっ！ 早くそのような汚らしいものをしまいなさいっ！」

魔女 「いつまでその強気が保てるか、愉しみだわ ●」

じゃ、効かないみたいだから更に増やして……●」

司祭 「ひあっ！ あ！ いやあっ！」

魔女 「ほおら、ぬる●ぬる● あったかいのが、  
じんじん●してくるでしょお●」

司祭 「っ……！ そんなもの……わたくしには通じませんっ！」

魔女 「ふうん……強がってるだけにも見えるけど……  
まあ、流石は司祭様ってところかしら。ふくらはぎを撫で  
るだけじゃ、あまり効かないわねえ……じゃ、更に上を  
もみもみ●しないとね●」

司祭 「う、上……？ いやっ、そこはっ！！」

魔女 「さあ、脚を開きなさい●」

司祭 「いやっ！ やめてっ！ あっ………！」

魔女 「ほら、えっちな声 ● セイラちゃんは真面目だから自覚はないかもしれないけど、そのドスケベな身体は、もう少しずつ興奮してきてるのよ ●」

司祭 「そんな、こと……っ！ ああっ……力が……入らない……いやああ……っ」

魔女 「はい、脚開いて ● あらあら、清楚な美人司祭様のおパンツが丸見えね ●」

司祭 「いやっ……いやあっ！ 見ないでええっ！」

魔女 「ふふ、キツキツなのはいてるわねえ……恥ずかしいくらいに おちんぽの形が浮かび上がってるわよお ●」

司祭 「い……言わないで……！ ううつ、なんでこんなことに……っ」

魔女 「でも、まだ勃起はしてないわね……もっと恥ず



かしいおちんぽになれるよう、まだまだマッサージしてあげないと♥」

司祭 「つつ！」

魔女 「では、膝から脚の付け根まで、失礼しまゝす  
♥」

司祭 「あっ……んっ！ ふ、くっ……はぁ……っ！」

魔女 「ふふ、可愛い声♥ 少しずつ効果が出てるわね  
……ほら、すり♥すり♥」

司祭 「んふう……っ！ こんなもの……効いて、ませ  
んわ……っ！ あなたが、厭らしく触るから……き、気  
持ち、悪くて……っ！」

魔女 「さて、次は大事なところ……」

司祭 「ひっ！」

魔女 「ふふっ」 セイラちゃんのおちんぽとおまんこは、触られただけで感じちゃうものね」 やっぱり触られるのは嫌なのね」

司祭 「なっ……か、感じたりなどしませんわ！ いいですか、性器というものは、このように軽々しく……」

魔女 「必死ねえ」 ま、すぐどぴゅどぴゅさせてもつまらないし、今はむちむちの太股を」

司祭 「ああっ！」

魔女 「ほおら、むちむちの太股も、脚の付け根も、腰だって触り放題」 いいのお？ このままじゃ、どんな触られちゃうわおう」

司祭 「っ……っ！ ん……！ ……………っっ！」

魔女 「ふふ・身をよじるだけじゃ、どうしようもないわね・じゃ……次はおへそ・」

司祭 「ふあっ?!」

魔女 「どうしたの? こんなところが責められるなんて思ってたかった? こんなところも媚薬を使えば敏感になっちゃうのよ・」

司祭 「……薬や魔力で、人を思い通りにするのが、そんなに楽しいのですか……!」

魔女 「ええ、すっごく愉しいわ・セイラちゃん は楽しくないのお?」

司祭 「楽しいわけがありませんっ! こんなことをするなんて、どうかしてますわっ!」

魔女 「そぉお? なら、ますます悦ばせなくなっちゃうわ……・セイラちゃんみたいな、うぶな娘をド

スケベなヒールに堕とすのが、私の一番の愉しみだもの  
●」

司祭 「……わたくしは……！ あなたなどには……邪  
なものには、屈しませんわ……！」

魔女 「んふふ● そのうち、あなたも愉しむようにな  
るわ●

ほおら● こうやって媚薬を塗ってあげながら、おへそ  
の周りや下腹部をなでなでしたら●」

司祭 「んっ！ あんっ！」

魔女 「ひくんっ● て、なっちやうのよねえ●」

司祭 「これは……くすぐったいだけです！」

魔女 「そお？ その割には、声が艶っぽい気が……」

司祭 「気のせいですっ！ わたくしがそのような声な  
ど！」

魔女 「その強気を打ち崩して、今に、自分から喘ぎまくるドスケベ司祭にしてあげる ● じゃあ次はあ……おっぱい揉ませていただきまあゝす ●

ふふ、なかなか立派に実ってるじゃない？ 司祭さんらしからぬ巨乳だわ ●」

司祭 「……お黙りなさい……！」

魔女 「真面目な割に、とても司祭には相応しくない、『汚らしい』ものになってるわよお ●」

司祭 「お、お黙りなさいと言っているのですっ！」

魔女 「あら、もしかしてコンプレックスだった？ ごめんなさいね ● でも安心して ● 私がたああっぷり調教して、このえつちな身体に相応しいドスケベさんにしてあげるから ●」

司祭 「ああ……神よ……」

魔女 「祈つても無駄無駄・じゃ、おっぱいも失礼しまあす・ほおおら、粘液ぬるぬるの手で・むにつと・と・」

司祭 「んっは！ ああ……っ！」

魔女 「流石にここは感度良好ね・ほおら、もっといくわよお……もみ、もみ・」

司祭 「あああっ！ く、んふうっ！ か、感度なんて……そんなもの、ありません、わ……ああっ！」

魔女 「それで隠せてるつもりなの？ 感じてるのバレバレよ・こうやって指を押しつけたら……・」

司祭 「あっ！」

魔女 「押し返してくる生意気おっぱい・感度も高くて、揉まれただけで喘いで……これで聖職者っていうんだから、聞いて呆れちゃうわ・」

司祭 「ひ、人の身体を、好き勝手に言わないでくださいっ！」

魔女 「だって事実じゃない？ とても司祭なんてやつてるおっぱいじゃないわよコレは」

司祭 「そんなこと……あっ！ やめっ！ あああんっ！」

魔女 「ほら、また感度が上がってる 自分で気付いてないだけで、煩惱が高まったのよ」

司祭 「そんな……！ そんな、ことあるわけ……」

魔女 「そんなことあるのよ♪ 無理矢理揉まれて感じる、煩惱の塊じゃない ぽら ぽら ぽおら そろそろ乳首も責めようかしらあ」

司祭 「あっ！ いやあっ！ も、もういや……これ以

上はダメですっ!」

魔女 「ふふっ ● 嫌がっても無駄よお…… ● え  
いっ ●」

司祭 「あっ!」

魔女 「んふふっ ● ほら、もつとがんばって耐えて  
みなさい ● ほら、ほらあ ●」

司祭 「あ! くっ……ああっ! あ! あんっ!」

魔女 「ほらほら ● なすがままじゃない ● 揉まれ  
るたびに感じちやって…… ほら、乳首も責めてあげる  
● つん、つんっ ●」

司祭 「あああっ! そこっ……やめてええっ!」

魔女 「ほおら、乳首が少しずつ勃ってきてる ● こ  
れを……くりくりっ ●」

司祭 「あああっ! そんなにつ、強くしたらっ……っ



はあっ！」

魔女 「こんなにハッキリ感じてくれちゃって……私の  
マッサージ気に入ってくれたのね ♡ 嬉しいわぁ ♡」

司祭 「はぁ……っ！ は……っ！ う、嬉しく……な  
ど……っ！」

魔女 「こんな状態でも強がってるのが、また可愛い ♡  
ま、おっぱいはこれでいいわ ♡ じゃ、次はうつぶせに  
なりなさい ♡」

司祭 「ああっ！」

【司祭、うつぶせにされる。】

魔女 「背中もキレイねえ ♡ じゃ、まずは耳……  
♡」

司祭 「あ……」

魔女 「ここもおっぱいと変わらないくらい感じるのよ知ってた？ この外側を、つつつ ♣ て撫でてあげるとお ♣ 」

司祭 「ふあっ！ ああゝゝっ！」

魔女 「不思議なくらい声が出るのよねえ ♣ ほら、もつともつと ♣ 」

司祭 「あっ！ あはああっ！ ひ、人の身体でっ！遊んでは……はううっ！」

魔女 「ふふ ♣ だって面白いんだもの ♣ じゃ、次は首に……つつーっ ♣ と ♣ 」

司祭 「あ！ あっ……あああ……っ」

魔女 「このまま背中もいくわよ ♣ 背すじを優しく、つつつ ♣ すりすりっ ♣ 」

司祭 「ふあっ！ あっ！ ……あっ！」

魔女 「ほくら ♪ なで、なで ♪ すり、すり ♪」

司祭 「はあっ！ あっ……あああ………っ」

魔女 「ふふっ ♪ もう声を抑えるのも忘れてるわね

♪ さて、出来上がってきたところで、そろそろ……

♪」

司祭 「出来上がってなんか……いやああっ！」

魔女 「腰をベッドに押し付けて、必死に隠しちゃって

♪ んっふふ ♪ なんだかオナニーしてるみたい ♪

さて、そろそろ、このまあるいお尻ね…… ♪ あらあん

♪ 司祭様あ、なによこの衣装 ♪」

司祭 「な、何がおかしいのですっ」

魔女 「髪で隠れてたけど……この服、キレイなお尻が半分くらい見えちゃつてるじゃない ● なぁにい？  
見えないからって、お尻を露出させて愉しんでたのねえ  
●」

司祭 「違いますっ！ なんと罰当たりなことを……これは、由緒正しき司祭の衣装で」

魔女 「えいつ ●」

司祭 「はぁんっ！」

魔女 「ほら、剥き出しだから簡単に触るのを許しちゃ  
う ● 本当はみんなの前でこっそり露出して、興奮して  
たんでしょ ●」

司祭 「わたくしは、そんな露出狂みたいな真似しませ  
んっ」

魔女 「ふうん……でも、お尻はえっちなことがして欲しいみたいだけど？ ほらっ」

司祭 「ああっ！ さわら……ないで……っ」

魔女 「ほらほら、強がらなくていいのよ」 もうじつくり焦らして、昂ぶってきてるのはわかってるんだから」

司祭 「ああっ……そのような、こと……あるはず……あっ」

魔女 「んふふ」 今、本気で感じた声が出たわね」

司祭 「違います、今は……あっ」 ああっ」 やめ、て……」 揉まないで、くださいいっ」

魔女 「そんな甘えた声出したら、もっとやれって言ってるようなものね」 えっちな薬はまだまだあるわ

よお ● ほおくら、すり、すりっ ●」

司祭 「いやああっ ● も、もうこれ以上 ● 変なもの  
を……ぬりたくらいでええっ ● あっ ● あ  
ひいいつ ●」

魔女 「ふふ……頃合いね ● ほら、また転がって、仰  
向けになりなさい ●」

司祭 「ああっ……！ はあ……はあ……っ」

魔女 「どんなことがあっても、そこは守るのね ●  
でも、もう身体がふやけてきてるでしょ？ そろそろ限  
界なんじゃないのお？」

司祭 「……な、何があっても ● 貞操だけは……守  
ります……っ ●」

魔女 「乳首吸われても？」

司祭 「っ ♪ な、何をされようとっ ♪ あなたには屈  
しません！」

魔女 「じゃあ遠慮なく、乳首いただきまあす ♪  
んちゅっ ♪ ちゅううつ ♪」

司祭 「ああっ ♪ あああああっ ♪」

魔女 「んふっ ♪ なんだかんだいつて、しつかり  
勃ってるじゃない ♪ 服の上からでも効いてるわねえ  
♪ じゃ、もう片方も…… ♪ ああゝん ♪」

司祭 「ひいっ ♪」

魔女 「じゅるっ ♪ れろ……ちゅぱっ ♪ じゅるる  
るっ ♪」

司祭 「んあっ ♪ あっ ♪ そんなにつ ♪ 吸って  
はっ ♪ はっあ ♪ ああああっ ♪ だ……ダメです…

…  
● 力が……抜けて……●」

魔女 「はーい隙ありー●」

司祭 「ああつ●」

魔女 「必死にアソコを守ってた両手も、もう私の片手で簡単にどかせちゃうくらい力が抜けてるのね● さて、再び司祭さんのお股を拝見つと●」

司祭 「いやつ● 見ないでくださいいつ●」

魔女 「あら……● あらあらあ● おパンツから飛び出そうなくらい、おちんぽが立派に勃起してるうつ● 先っぽから、先走り汁をだらだら流しちやって……とても貞操を守ろうなんて言えない、本気の発情勃起じゃない●」

司祭 「いやあ……！ 違う……違うんですのお……● これは……媚薬のせいであ……っ●」



魔女 「ふふ・ 結局、薬には勝てなかったことを認めてるじゃない・ ガツチガチに興奮してるところ、悪いんだけどお……当然・ ここにも薬を塗ってあげないとね・」

司祭 「いやっ・ いやですっ・ そこだけはあつ・」

魔女 「えっちな液体を手の平に、たろっつぷりまぶして……・ ほおら・ ぬるっ・ と・」

司祭 「ああつ・ ああああつ・」

魔女 「根本から、カリ首の方まで丹念に……・ ぬりぬり・」

司祭 「わっ・ わたくしのっ・ ペニスがつ・ 媚薬まみれにいいっ・」

魔女 「気持ち良いでしょお？・ でも、おちんぽは

特別だから、更に塗りたくるわよお ♪ それ、ぬちゅんっ ♪ と ♪」

司祭 「あっひいっ ♪ またっ ♪ またああっ ♪ ペニスがつ ♪ 熱いひいひいひいっ ♪」

魔女 「ふふっ ♪ 焦らし過ぎたかしら ♪ すっごく気に入ってくれたみたいねえ ♪ でも、これはまだ下準備に過ぎないわよ？ ここから、もっともっといじめてあげるんだから…… ♪」

司祭 「ひ…… ♪ ひいひい……っ ♪」

## ■ 2. 手コキ

魔女 「さてと……まずは、この先走り汁をいただきます  
ちやおうかしら ♪」

司祭 「ま、まさかつ！ そんなものを吸うおつもりなの  
のですかつ？」

魔女 「自分の先走り汁なんだから、そんなものって言  
い方はないでしょお ♪ 少しよ、少し ♪ んちゅっ…  
… ♪」

司祭 「あひっ ♪ ひいいいっ ♪」

魔女 「ふふ ♪ セイラちゃんの先走り汁、おいしい ♪  
流石は司祭様ね、魔力が漲ってくるわあ ♪」

司祭 「や、やはりっ ♪ このような手段で ♪ 魔力  
をっ…… ♪」

魔女 「そうよね？ お互い気持ちよくなれる、最高の  
修業法よね ♡」

司祭 「こんなこと……！！ 人道に……倫理観に、反し  
すぎてますわ……ああ ♡」

魔女 「そういうことは、手コキを耐えてから言いな  
さあい ♡ ほら、真ん中あたりをやさしく指で包んで、  
ゆ〜っくり、しこ ♡ しこ ♡ しこ ♡ しこ ♡」

司祭 「あ ♡ あ ♡ はああん ♡」

魔女 「どう、私の手コキ ♡ こつちも自信あるのよお  
♡ 片手だけで、何人のヒーローをドピュドピュさせ  
てきたかしら ♡」

司祭 「はう ♡ この ♡ 外道お ♡ くつ  
ふうう ♡」

魔女 「あ、今は、うんと手加減してるから安心してね

すぐドピュつても困るから……つて、手加減しててもイキそうになつてるけど」

司祭 「こゝ、これで、手加減んっ、くほっ、いゝ、イキませんっ、こんなもののおおっ」

魔女 「がんばつてるわねえ……けど、こっちは正直ね、またお汁が出たわ、れろっ、じゅるるうっ」

司祭 「んおおおっ、すっ、吸わないでええっ、」

魔女 「かるく吸ってるだけじゃない、私が本気出したら、こんなもんじゃないんだから」

司祭 「ど、どこまで、見下して……んひいいっ、カリまでっ触れないでええっ」

魔女 「見下されて悔しい？ イキそう？ ほら、セイラちゃん、がんばれ、がんばれ」

司祭 「ふっ ● く ● ふ ● あっ ●」

魔女 「あ、またおちんぼがびくびくして、先走り汁が  
● だらだら流れて、媚薬と混じって……ねちゃね  
ちやつて ● 厭らしい音が出るわよ ●」

司祭 「やめ……て ● 聞かせ ● ないで ●」

魔女 「そうは言っても、おちんぼが悪いんだもの ●  
私じやどうしようもないわ ● ほらほら、もつと我慢し  
ないとお ●」

司祭 「あっ ● く ● ふ——っ ● ふう——っ ●」

魔女 「あはっ、ほんとに我慢しようとしてる ● で  
も、根本から先っぽまでをなぞってあげるとお……  
●」

司祭 「あっ ● あ ● ああ——っ ●」

魔女 「うふふっ ● はしたない声が出たわ ● ここ

なの？ セイラちゃん、裏スジが弱いのお？」

司祭 「こんなっ・ものっ・なんともっ・あひんっ・そ、そんなところ・触られたくらいで・わたくひはああっ・」

魔女 「我慢しなくていいのよ・ほらっ・おちんぼの全部を媚薬で揉みくちやにされて・はしたなく  
イツちやいなさい・セイラちゃんの煩惱、ドピュド  
ピュしなさあいっ・」

司祭 「あああああっ・いやっ・いやああっ・  
だっ・ダメっ・止めっ、あっ・あっ・  
ああああああつっ・」

魔女 「あはっ、出た出た・えっちなおちんぽ汁、ド  
ピュドピュ出たあっ・」

司祭 「んふああっ・あ・あっ……・は——っ

♥ はあ——っ♥」

魔女 「んふふ♥ 立派でドスケベな射精だったわよ  
♥ どう？ 悪い魔女にイカされた気分は♥」

司祭 「ふっ♥ う……♥ なんて♥ ことを……っ  
♥ あなたのっ……手なんかにいっ♥」

魔女 「よかった、まだまだ元気そうね♥ なら、もっ  
とキツいのいくわよお……♥」

司祭 「っっ♥ わ♥ わたくしは……♥ まけませ  
ん……っっ♥」



### ■ 3. 媚薬の口移し

魔女 「さ、この特製媚薬を……んっ、ん……」

司祭 「あなた、まさか……やめ、んんんっっ」

魔女 「んふ・んっ・んちゅっ・れろおっ」

司祭 「んっ・んぐっ・っく・ぷはっ・はっ  
・は……っ・い、いきなり・接吻などっ、何  
を考えているのですっ」

魔女 「んふふ、怒らないの・当然だけど、この媚薬  
は経口摂取の方が効果が高いのよ・肌に塗るのと  
違って、すぐに効果が表れるわよお」

司祭 「こ、これ以上の効果が……？ そんなこと……  
ああっ」

魔女 「ほら、おっぱいがまた一段と敏感になった」

もつともおゝつと気持ち良くなるわよおゝ」

司祭 「やめて ♪ やめ、なさいっ ♪ もう ♪ これ以上なんて ♪ んぶっ ♪ んっ……」

魔女 「ん ♪ ちゆるっ ♪ れろお…… ♪ んっ ♪ ん……」

司祭 「んぶっ ♪ あ ♪ また、やめ、んむんっ ♪ んっ ♪ んっ ♪ ぶはっ ♪ あ ♪ あはあっ ♪ ぢゆるっ ♪ ん…… ♪ んふう……」

魔女 「……っは ♪」

司祭 「ぶはっ ♪ はっ…… ♪ はあ——っ」

魔女 「ふふ…… ♪ なあにい？ 嫌がつてた割に、情熱的なキスをするじゃない」

司祭 「はっ ♪ こ、これはっ ♪ あなたがいきなり、舌を入れて……いや、あの……」

魔女 「かなり効いてきてるわね……頭が回らなくなつ  
てるわよ ● ほら、もつと素直になりなさい ●  
ふうーっ ●」

司祭 「んひっ ● やめ、やひやいつ ● 息 ● ふ  
きかけるのっ ● うっひいつ ● 耳がつ ● 首も……熱  
いいいつ ●」

魔女 「息を吹いただけでビクビクしちゃって ● ど  
れ、おちんぼの方は…… ●」

司祭 「んひやあんっ ● いやっ ● はおっ ● そん  
なものっ ● とらないでえっ ●」

魔女 「じゅるるっ ● ふふ、一発出したばかりなの  
に、また先走り汁が垂れてる ● 今なら胸だけでもイけ

るかも　　◆　　どうなの、勃起乳首さん　　◆　　」

司祭　「んおっ　　◆　　あ　　◆　　っはあっ　　◆　　ダメっ　　◆  
今はダメですっ　　◆　　ダメですのおおっ　　◆　　」

魔女　「ダメ？　　◆　　何がダメなの？　　◆　　どうダメなの  
お？　　◆　　言ッてくれなきゃわかんない　　◆　　」

司祭　「それはっ　　◆　　ちっ　　◆　　乳首っ　　◆　　乳首がっ　　◆  
あああ　　◆　　熱いっ　　◆　　熔けるうううっ　　◆　　」

魔女　「もう限界みたいね　　◆　　イクの？　　◆　　司祭様の勃  
起乳首　　◆　　はしたなく両方ともイッちゃうのおお？

◆　　」

司祭　「いやあ　　◆　　イキたくない　　◆　　イカ  
ないっ　　◆　　いかない　　◆　　あっ　　◆　　乳首っ　　◆　　乳首  
がっ　　◆　　あっ……………っ　　◆　　」

魔女　「おっと　　◆　　まだイカせないわよ　　◆　　」

司祭 「へはっ?! ● あ ● あ……っ ● なん…  
…っ」

魔女 「あら? 今『何で』って言おうとした? すっ  
ごくザンネンそうな顔してるし……やっぱイキたかつ  
たのお? ●」

司祭 「そんな ● そんなことはありませんわ ●  
わ ● わたくしの勃起乳首は ● このような辱め  
に ●」

魔女 「勃起してるのは認めるのね ●」

司祭 「っっ?! ● い ● 今のは ● 違っ…  
●」

魔女 「だんだんと悦びを知ってきたわね ● でも、こ  
こからが本番よお…… ●」

#### ■ 4. パレオコキ

魔女 「またおちんぽがビクヒグして、イキたがつてる  
わねえ ● じゃ、これに司祭様のパレオを被せて ●」

司祭 「あつ ● な、何をつ ● んはああつ ●」

魔女 「ほおら、パレオで包んで、おちんぽをしこ ●  
しこ ●」

司祭 「あああつ ● なんてことをおつ ●」

魔女 「あらあら、また先走り汁が溢れて ● パレオが  
濡れて、おちんぽに張り付いてる ●」

司祭 「あああつ ● 神聖な衣装を ● 淫具にするな  
どお ●」

魔女 「その神聖な衣装で出来たオナホールで、啼くほ  
ど気持ち良くなってるのは誰かしら？ ほら、ビクビク

してきた ● また出るの ● 出ちやうのお？ ● 」

司祭 「あああつ ● ダメっ ● またっ ● 出るう…

………ああっ？！」

魔女 「おっと ● ふふ、イケると思った？ 簡単に

はイカせないわよ ● いっぱいいじめて、精液を溜めてから、めいっぱい惨めにドピュらせてあげる ● 」

司祭 「あなたは ● どこまで………あつ ● ああっ

● 」

魔女 「ほら、もう一回 ● しこしこしましょうねえ」

● 」

司祭 「ああっ ● こんなっ ● こんなのいやあっ ●

あっ ● またっ ● 」

魔女 「あら、また出そう？ ● なら今度は根元をキ

ツうく締め付けて……… ● 」

司祭 「あぁっ ● で、出ないっ ● んひいっ  
●」

魔女 「ふふ、勃起チンポの形が歪むくらい締め付けて  
るのよ ● これなら精液が上がってこないから、イキた  
くてもイケないの ●」

司祭 「くふううっ ● ふう——っ ●」

魔女 「寸止めされてツライ？ でもまだいじめるわ  
よお ● ほら、カリ首にひっかけるように、しこしこ  
しこしこっ ●」

司祭 「こっこの程度っ ● つらくなごっ ● んぁっ  
指が ● カリにいい ●」

魔女 「カリ首にひっかけるようにシコられるのツライ  
でしょお？ どう？ 堕ちちやう？ 堕ちたら気持ち良



くドピユれるわよお？」

司祭 「堕ちませんっ　こんなこと　気持ち良くな  
どお　だからっ　手を　早く……離しなさ  
いいい」

魔女 「強がりながらもイキそうじゃない　いいわ、  
出しちやいなさい　神聖オナホの中でドピユっちゃ  
いなさい」

司祭 「ああっ　いやああっ　止めて　止めて  
とめっ　あ　ああああああああっ」

魔女 「あっはあ　出たあ　パレオを突き破るく  
らいスゴい勢いで出てるう」

司祭 「ああ——っ　まだ出てるう　こんな射精  
いやなのにいい……」

魔女 「嫌なのに……気持ち良いでしょお ● 腰もガク  
ガク動かしちゃって ● 堕ちる？ ● 今度こそ堕ち  
ちやうう？ ●」

司祭 「はへえ…… ● 堕ち……まひえん…… ● 腰  
● 動いてらんか…… ●」

魔女 「強情を張ってるけど、あと一歩ね ● さて、そ  
ろそろトドメといくわよお…… ●」

## ■ 5. パイズリフェラ

魔女 「最後は、このおっぱいで包んであげる ● ほ  
ら……ぎゅむうつと ●」

司祭 「ひっ ● もう ● やめ ● あああっ ● ペ  
ニスっ ● わたくしのペニスがっ ● お胸の中  
にいいいっ ●」

魔女 「うふふっ ● 私のおっぱい、セイラちゃんのおっぱい食べちゃった ● でもスゴいわこのおちんぽ ●  
大きすぎて、私のおっぱいからもハミ出ちゃってる ●  
」

司祭 「あ——っ ● やめて ● 今すぐ離れてええっ ●  
」

魔女 「あら、ここからが本番なのよ ● まず、溢れた

先走り汁と精液を吸い取って……んちゅうっ ● ずじゅるるるっ ●」

司祭 「んっはあっ ● ああああゝっ ●」

魔女 「んふ ● お掃除完了 ● じゃ、この剥き出しの尿道に…… ●」

司祭 「ま、待ちなさひっ ● まさか、そんなところにまで ● 媚薬を入れるおつもりではっ ●」

魔女 「察しがいいわね ● もしかして期待してるのかしら ● じゃ、フェラついでに口で直接注いであげるわね ● んっ…… ●」

司祭 「やめっ ● もう媚薬だけはっ ● ああっ ●」

魔女 「じゅぶっ ● んちゅうぶっ ● ぶちゅうううっ ●」

司祭 「はああああああつっ ♪ ペニスっ ♪ ペニスにっ流れ込んでえええっ ♪ あっ ♪ 熱っ ♪  
ああああゝっ ♪」

魔女 「んぷっ……やっぱり、媚薬はコレが一番効くわねえ ♪ さあ、更にパイフェラいくわよお ♪ おっぱいと口のダブル攻撃を味わいなさい ♪」

司祭 「ひいひいひいっ ♪ お胸がっ ♪ ペニスを扱いてっ ♪ はあっ ♪ 咥えないでえっ ♪ ど、同時になんてっ ♪ こんな無理ですううっ ♪」

魔女 「ほらっイキなさいっ ♪ セイラちゃんの無様な堕ち顔晒しなさいっ ♪ んぢゆるるるるるっ ♪」

司祭 「ダメっ ♪ ダメえっ ♪ あっはああああああああつ ♪」

魔女 「んぐっ ♪ んっ……ん ♪ ふふ、セイラちゃ

んのおちんぽ汁、おいひい」

司祭 「はあ——っ ♪ あはああ——っ ♪ あ ♪  
あああ…… ♪」

魔女 「どろお？ ♪ そろそろ堕ちてくれたかし  
ら？」

司祭 「うあ…… ♪ 堕ち……まひえん…… ♪ ひー  
る……らどに ♪ わたくひは」

魔女 「そう ♪ なら更に媚薬追加ねっ ♪ ん  
ぢゅうううっ ♪」

司祭 「んわああっ ♪ それっ ♪ それええっ ♪ ま  
たっ ♪ ペニスがああっ ♪」

魔女 「容赦なくいくわよ ♪ おっぱいでギチギチに締  
め付けて……んぶじゆるっ ♪ ずちゅうううっ ♪」

司祭 「あ——っ ♪ あああ——っ ♪」

魔女 「んふふっ ● やめて欲しかったら正直に言いなさい ● おちんぼ気持ち良いです、いっぱいドピュドピュしたいですうつて ●」

司祭 「言いませんっ ● そんなことっ ● わたくしのペニスはっ ● ドピュドピュなんてっ ●」

魔女 「言わないと本当に堕とすわよ ● んじゅうっ ● じゅぶるるううっ ●」

司祭 「あゝゝゝゝゝゝゝゝゝっ ● もっもうダメです ● 限界ですうっ ●」

魔女 「んぶっ、なら言いなさい ● みつともなく恥を晒しなさあいっ ●」

司祭 「あぁっ…… ● わ、わたくしの、ペニス…… ● 気持ち良いです……」

魔女 「ペニスじゃなくておちんぼっ ●」

司祭 「んひいっ ♪ おちんぽ ♪ おちんぽ  
おおおっ ♪ おちんぽ気持ち良いですっ ♪ いっぱい  
ドピュドピュしたいですううっ ♪ お願いですっ今  
すぐ止めてくださいっ ♪」

魔女 「ふふ……正直に言えたお礼に……更に媚薬を追  
加ね ♪ んじゅううっ ♪」

司祭 「そんなっ ♪ 約束がっ ♪ ああっ ♪」

魔女 「そんな無様な宣言しちゃう淫乱司祭様、見逃す  
わけないじゃない ♪ ほおら、狂っちゃうくらいイキ  
まりなさあいつ ♪」

司祭 「あああああああっ ♪ ダメです ♪ ダメで  
すっ ♪ やめっ ♪ あ ♪ あ ♪ いくっ ♪ おちん  
ぽっ ♪ おちんぽいきますっ ♪ いっっ





んぽ様を、たくさん導いて差し上げますわ……  
●  
」